

小泉先生の思い出

尾崎 俊介

私が小泉直先生に初めてお会いしたのは、1992年の春に愛教大に赴任した時のことだから、今からちょうど30年前ということになる。

当時愛教大は「総合科学課程」と銘打った新課程を新設したばかりで、その一角を占める「国際文化コース・英米文化選修」では、名伯楽・久田晴則先生（現・名誉教授）が着々とスタッフの駒組みを進めていた。その結果、私より2年早く着任された言語学の小泉先生、1年早く着任された英米哲学の大澤秀介先生、そしてアメリカ文学の私、さらに私の後に着任された英米建築史の佐藤彰先生や、はるばるイギリスから赴任されたアンソニー・ロビンズ先生など、それぞれ専門も異なれば出身地・出身大学も異なる多様なスタッフが集結し、英語教員養成のためではなく、アカデミックな英米文化研究の拠点として、英米文化選修の陣容が定まったのだった。新しい構想に基づいた新しい学科の創設を盛り上げようということで、英米文化選修の教員間の団結は本学の中では例外的に（？）強いものだったが、特にスタッフの中の若い方の三人、すなわち大澤秀介先生と小泉先生と私は互いに会った時から妙に馬が合ったこともあり、三人で「助教授〜ズ」なるユニットを結成、休みの日には一緒にハイキングに行ったりして大いに楽しんだものである。そしてそんなお付き合いの中、私が大澤先生を「叔父貴」、小泉先生を「兄貴」と呼ぶのが習わしとなった。だから小泉先生は、私にとっては昔も今も「兄貴」なのである。

以来30年、「兄貴」こと小泉先生と私は、いわばひとつ釜の飯を食ってきたことになる。血を分けた実の兄弟ですら、そんなに長い間毎日顔を合わせるといえることはないだろう。無論、親しき中にも礼儀ありということ最低限踏まえてはいるが、その上で小泉先生と私は阿吽の呼吸で互いの腹の内を

読み、瞬時に動けるだけの絆を築いてきた。久田先生、佐藤先生、大澤先生など先輩たちが次々と定年で愛教大を去られ、さらに度重なる大学の改組(＝改悪)の結果「総合科学課程」も「国際文化コース」も「英米文化選修」も今は存在しなくなってしまったが、それでも「本学に文化研究の拠点あり」と胸を張った「英米文化選修」の伝統は、今日に至るまで、先生と二人で力を合わせて守ってきたという自負はある。

だから小泉先生のお人柄について私が語れることは多いのだが、まず言えるのは「細かいところまで気を配る慎重居士」。何しろ座右の銘が「常に最悪の事態を想定しておけば、後顧の憂いなし」と言うのだから、先生の慎重さがどれほどのものか、想像できるのではないだろうか。しかも実際に最悪の事態が起こった場合には「しょうがない・・・」の一言で受け流す柔軟な悲観主義者でもあった。一方、弟分の私は大雑把でいい加減、そして度はずれた楽観主義者なのだから、まさに賢兄愚弟の典型例ということになる。実際その通りなので、例えば午後1時20分に始まる3限の授業を私が寝過ごして(?!) すっぱかすというようなことが過去何度かあったが、その度に先生はわざわざ当該教室まで出向き、待ちくたびれた学生たちに「急用が入ったため、今週の尾崎先生の授業は休校です」というアナウンスをして、駄目な弟分の尻ぬぐいをしてくれたものである。つまり私が先生のためにしょっちゅう「最悪の事態」を用意したようなものだが、そんな時ですら先生は、「しょうがない・・・」の思いを胸にたちまち善処してくれ、しかも私はそういう類のことで小泉先生からお小言の一つももらったことがないのだから、先生を評する言葉としてもう一つ、「優しく辛抱強い人」というのを奉るべき義務が私にはあるのだ。

だが「慎重居士」で「優しく辛抱強い人」だけでは、どうも小泉先生の本領を言い当てられていないような気がする。もちろん小泉先生はまさにそういうご性格ではあったが、もう一つ、茶目っ気があると言うのか、ちゃっかりしたところもあると思う。前もってよく準備するということの延長線上にあることだとは思いますが、先生は妙に鼻が利くタイプで、思わぬところに転がっているお得な話を目ざとく見つけ、それをひょいとモノにするのが実に上手いのだ。例えば、愛教大では卒業式の日と同窓会主催のパーティが催され、

式典を終えた卒業生たちにご馳走を振る舞うことになっているのだが、このパーティには教員も参加できること、しかも卒業式が終わる直前、まだ卒業生が会場に来る前に行くごと馳走が食べ放題であることを、小泉先生はどこからか聞きつけて来られたりするのである。以後、先生と私、それに同じくお得な話が鼻が利く社会科の黒川知文教授（現・名誉教授）の三人で、毎年卒業式の日「パーティ会場荒らし」を楽しんだことは言うまでもない。弟分として兄貴にくっついていて、こういうありがたいおこぼれもある。

ただ、ここで声を大にして言いたいのだが、小泉先生は確かにご自分のメリットになることに敏感ではあったものの、それは「自分だけ良ければいい」ということでは全くない。先生は「自分にメリットがあり、かつ、他の人にとって大きなメリットがある」ということでなければ絶対に動かないのである。そういう点での小泉先生の公正さは非常に厳密なところがあった。そして、実はこの公正さこそが、私が小泉先生から学ばせていただいたことであり、先生を敬愛してやまないところなのだ。「ちゃっかりさんだけど、どこまでも公正な、信頼できる人」。私にとっての兄貴・・・いや、小泉先生は、そういう人である。

30年間に亘る先生との思い出は、語り出せばきりが無い。何しろ学期中の週日はほぼ毎日、共同研究室で一緒にコーヒーを飲み、四方山話をしながら帰宅前のひと時を過ごしてきたのだ。読んだ本、観た映画、それぞれが休み中に楽しんだ旅行の話などもよくした。時には研究テーマについて話し、話すことで頭の中を整理したりもした。互いに執筆中の著書のことを打ち明けたり、最近では二人共著で『裏ワザ流英語術』（松柏社）という本を出したりもした。それぞれが受け持ったゼミ生の卒論指導の苦労もこぼしあった。大学運営に関する事務的な連絡や議題の検討、時には入試問題の作成なども、コーヒーを飲みながらの雑談の中で大抵は片付いてしまった。その他、懐かしい卒業生たちの愉快的思い出や、果ては人聞きの悪い噂話も、コーヒーや茶菓子とともに腹の中に納まった。

季節のいい時などは、授業や会議のない水曜日の午後などを見計らって「昼休み」を若干拡大解釈し、学外へお昼ご飯を食べに行きがてら、少しばかり足を延ばしてつかの間のミニ観光を楽しんだりもしたものである。春であれ

ば佐布里の梅見、初秋であれば常滑にある鴨せいろの名店、晩秋ならば足助の紅葉……。近年、愛教大も色々な面で様変わりしてしまい、私にとって必ずしも居心地のいい職場ではなくなってしまったところもあるが、それでも何とか日々の職務に耐えていられたのは、気心の知れた先輩同僚として小泉先生が近くに居て、何かにつけ相談に乗ってもらったり、ちょっとした気晴らしをすることができたからだと思ふ。

だから小泉先生が定年を迎えられたことは、私にとっては大打撃なのである。しかも、私にとってもう一人の長年の同僚であり、親しい友人であり、一緒にコーヒーを飲んできた仲間であるアンソニー・ロビンズ先生まで定年で大学を去られるとなると、私としては本当に寂しい。寂しいという言葉では表せないほど、寂しい。

だが幸いなことに、小泉先生は（ロビンズ先生も）まだ当分非常勤講師として愛教大で教鞭を執り続けてくださるという。だからそのことを心の支えとして、ここはひとつ私も元気を出し、小泉先生の新たな人生の門出を笑顔でお祝いしようと思ふ。

小泉先生、いや兄貴、長い間お世話になりました。ありがとうございました。この先ももうしばらく駄目な弟分の尻ぬぐい、よろしく願いいたします。